

## 神秘的自然主義建築家

## アントニン・レーモンドの見た原像

## 一流浪(ディアスポラ)するコスモポリタン

## 松野高久(建築家)



アントニン・レーモンド(1888-1976年)  
(Raymond in the early 1950s)  
麻布弁町のスタジオにて  
(出典:『自伝 アントニン・レーモンド』)

## 1. レーモンドの父親はユダヤ人、母親はチェコ人

## ー「ハラハー」では非ユダヤ人ではあるがー

土屋重文は、歴史学者のイレーナ・ヴェヴェリユヴァの2006年の本『アントニン・レーモンドとライマン家ー20世紀ユダヤ人家族の運命』(チェコ語)は、歴史的調査の結果、レーモンドの祖父がユダヤ人だということがわかる資料であると私に話した。

Yola Gloaguenは京都大学の博士論文として「アントニン・レーモンドの20世紀初頭におけるボヘミアから日本への建築の旅」において、母のRuzena Tausig ルジエナ・タウスィゴヴァーはカトリック教徒の農家の家柄であるが、父のAlois Reimann アロイス・レイマンはドイツ系のユダヤ人商人であることを書いている。『ユダヤ人ーその信仰と生活』(アラン・ウンターマン著、石川耕一郎・市川浩訳、筑摩書房、1983年)の「第1章ユダヤ人の基本概念」の「生物学的出自」には、

「ハラハー」(ユダヤ教の慣例的法)によれば、ある人がユダヤ人であるとみなされるのに十分な要件は、母親がユダヤ人であるということである。・・・また、伝統的ハラハーによればユダヤ人の父親と非ユダヤ人の母親から生まれた子供には、この同じ法規は適用されず、その子供は非ユダヤ人とみなされた。もっとも、ユダヤ教改革派ではしばしばそうした子供をユダヤ人として受け入れて入るが。

レーモンドの出自はこの通りであるといえる。レーモンドは『自伝』において、父親の出自を「農民の血筋をひく」とだけ、また祖父のアブラハム・レイマンについては「記憶はさだかではない」と書いているが、改革派ユダヤ教徒であった。母親については詳説しており、父親がユダヤ人であるから明言をさせているが、「ハラハー」においては非ユダヤ人であることを暗示している。しかし、18世紀のドイツから発しているユダヤ教改革派では、片親がユダヤ人ならその子どもはユダヤ人とするから、藤森照信氏はレーモンドをユダヤ人だと書いている。

レーモンドには、そのユダヤ人としての「アイデンティティ」があったから、その原像が建築に表出されているのである。そしてキリスト教者的に生活し、多くのキリスト教会の設計を受注している。しかし、ユダヤ人の血を引く出自から脱れることはなかった。このことから私はレーモンドの建築作品の中から、出自による原像を反映し、建築に独特の風味を与えていることを抽出したい。日常生活でもレーモンド夫妻はキリスト教者としては感じら

れなかった。土屋は無宗教とさえ言う。日曜日には教会に行くのではなく、むしろ家にいたようである。ユダヤ人は土曜日の安息日(シャバッド)にはシナゴーク(ユダヤ教会堂)へ行き、家族で食事を囲む。

また、ノエミ・レーモンドの葬儀はカトリックで行われたが、アントニン・レーモンドの葬儀については不明である。『アントニンとノエミ・レーモンドー建築と暮らしの手作りモダン』(太田泰人編集、耕文社、2007年)の「エピローグ」に、

1976年にアントニンが、そして1980年にノエミが世を去った後、ニューホープの家の正面には2本のトウヒが植えられた。それは、夫と妻として、建築家とデザイナーとして、日本とアメリカの文化を仲介する同志としての、レーモンド夫妻の60年に及ぶパートナーシップにふさわしい記念碑となっている。

この2本の記念碑としての「トウヒ」(唐檜)、つまりトラノオミミは何を意味しているのであろうか。

## 2. レーモンドの「宇宙」、「神」、「原則」、「靈感」、「自然」、「創造」、「人間」、「大地」そして「絶対価値」ー西欧人と日本人との対応の違いー

レーモンドの「デザインにおける永遠の価値」(1949年)には、人間が宇宙の秩序の本源に触れるためには、

それには、大自然に触れることだ。自然に包括されて、さらに、われわれの感覚やことばを超越し、超意識的な、靈感と啓示にふれるのだ。人類は、歴史以前から、このすべての啓示との接触のために、自分の状態を探求し、心と体、行為と創造の、ある原則をつくり出すのが成功してきた。・・・その探求は、ひとつの覗き窓であり、それを通じて人間は、宇宙を支配する人間の叡智の、絶対価値をうかがい見ることができる。・・・人は行動の自由を持ち、地上の唯一の生物である。宇宙の創造を支配する法則に従い、また調和をもつような芸術的な環境を作る。

この「絶対価値」とは、宇宙の秩序を守る大自然の法則のことである。また、下位概念としての「相対価値」については製造業者の量産システムは大衆の気まぐれに合わせた、平凡で大衆を喜ばせるための移ろいやすい、買い手をそそのかすデザインの

ことである。しかし反対に、レーモンドはこの真実の美を「絶対価値」としての建築を作らねばならないと書いている。

そしてワードとして、「宇宙」、「神」、「原則」、「靈感」、「自然」、「創造」、「人間」、「大地」、「絶対価値」は、『旧約聖書』からの言葉が多い。そもそも人間も大地が生み出した自然の一部にすぎない。したがって人間が神とかかわっている物語である『聖書』では、大地は不可分なのである。「トラー」(律法)では、天地創造の物語で、「自然派」と同じく世界の秩序であり「不文律の体現」として描写された。さらに、レーモンドの「日本建築の精神」(1953年)から同じワードを解読する。

大昔から日本人は、人間の生命が、大自然と結びついていることに、極めて興味をもっていた。これは西洋人の観念では、人間が自然界の帝王であるのとは反対である。人間は、大自然を支配しているのではなく、大自然の状態や、部分のように、日本人も大自然の一部であると信じている。

この一切を包含する観念は、日本人の生活と創造の精神的、物理的状态を理解するための基本である。これが西洋人の観念と逆なのである。

人々は、大自然と彼自身を一つのものと考え、愛しみ、理解し、大自然の独裁者、征服者として考えるより以上に、自然と親しむのである。

日本人は宇宙の神秘、大自然の力を受け入れる。見えるものでも見えないものでも、創造の各部にあらわれた自然の影響も、大地とその住民も、当然のこととしてうけいれている。彼らは、大自然と密接な関係にあることを願い、庭園や住居、調度品、芸術の主題や文学や詩、とりわけ庭園は重要であるが、これらによって自然との結びつきを、更にははっきり感じるのである。住居自身は、その庭園の一部にすぎない。住居は、庭園の中に草のように育ち、材料と形を、植物や、大地、砂利、石のごとく、自然に包含させる。その寸法は、結局人体の各部の寸法となる。

大自然は、その絶対価値といえるものが、人間のはかなさに対してあるのだということを日本人に対し浸透させてきた。日本人は、その絶対価値、無限、不安とを原則として、また、自然の法則として認めている。この原則は、すでに彼ら自身の一部となっていて、それほど自分では考えていない。・・・時として、日本人の生活や芸術の中に、はかなさと永遠、あるいは脆さと強さの象徴が、内的闘争となってあらわれる。・・・この考え方は、西欧の建築家とは異なる哲学をもっているために、全く別の存在となっている。

レーモンドは、『聖書』などの西欧的なワードを使って日本人の自然感と自己の建築感について書いている。「絶対」というワードは日本的ではない。「神」、「宇宙」、「原則」という概念と深く関係するからである。レーモンドは日本建築についてもその形態だけではなく、根本の原則まで理解するに到達していたので

ある。しかし結果的には、いわゆる日本建築ではなく、根底は西欧建築であった。

レーモンドは西欧建築により大「自然」から「宇宙」を支配する「絶対価値」としての「靈感」から、その「原則」の「啓示」を受けた。一方で、日本建築からは、大「自然」の一部として、それと「親和」する「絶対価値」の「自然の法則」を受容するのである。共に「自然」からの「絶対価値」の「啓示」であるが、「受容」するか否かの違いである。しかし、その「絶対価値」は同じものではない。ユダヤ人は「宇宙」史的な価値を持っている。レーモンドは「唯一」絶対神の聖なるものとは、「永遠」者の神とかのワードを多く用いているが、それはユダヤ教のヤハウェに対して使われた語である。

また、「相対価値」に対して「絶対価値」というワードもよく用いたが、それは「律法」としての「トラー」のことで、ユダヤ教の中心概念である。狭義には『旧約聖書』の最初の「モーゼ五書」のみを指すが、ユダヤ教そのものである。「トラーは天地創造より先に存在したという教えや、トラーはまさに自然界全体の基礎となる建築家の青写真であるという教えがある」(『ユダヤ人ーその信仰と生活』筑摩書房)いわば、キリスト教におけるロゴスであるから、建築家のレーモンドはユダヤ人としてこの言葉を知らない訳はない。そして、「トラーとは、創造に先住する青写真だから、あらゆる創造の所業の総合体」であると、ユダヤ人は安息日(サバート)には、伝統的なシナゴークでこの「モーゼ五書」を朗読するが、『聖書』に含まれる部分もある。レーモンドは『自伝』で、

日本が教えてくれた絶対価値について、私は個人的には今も忠実である。それは私が、日本やアメリカ、ヨーロッパの仲間と語る時、常にその輪郭を確認している次に示すようなものである。

私は、この宇宙の中に何か不思議な秩序があり、宇宙の万物はこの秩序の絶対価値に従って創られていると信じている。これらの価値は今も将来も永遠に同じであり、不変のものであろう。ある創造的芸術家は、さまざまな形の中にも現われたこの宇宙と密に接することにより、絶えずこれらの価値の把握に努力し続けていた。

人生には変化とか、一時的な場面はあるが、永遠の価値という一つの知識こそ、われわれの追求することなのである。変化は不可避であり、それ自体が解決するであろう。

ユダヤ教でヘブライ語の「torah」(トラー)がモーゼに与えられた規範としての「成文律法」だとすると、「talmud」(タルムード)は「口伝律法」であり、「伝承」とか「教訓」という意味である。その主要思想としては、「神は創造者、唯一者、全能、全知、永遠、超越者」である。そして「律法」(トラー)は神の啓示であり、神の言葉である。(『ユダヤの思想』荒井章三・森田雄二郎、大阪書籍、1985年)以上、レーモンドはこの「トラー」と「タルムード」からの引用ワードを多く使っていたことがわかる。そ



図1 ポール・クローデル  
(出典：『自伝 アントニン・レーモンド』)



図2 Antonin&Noemi Raymond,70.leta  
(出典：『建築』特集 アントニンレーモンド作品集  
1961年 10月)



図3 シモーヌ・ヴェーユ



図4 デーテアナム建設現場のルドルフ・シュタイナー (1913年)  
(出典：『世界観としての建築—ルドルフ・シュタイナー論』上松佑二 相模書房 1974年)



図5 第一ゲーテアナム  
(出典：『世界観としての建築—ルドルフ・シュタイナー論』上松佑二 相模書房 1974年)

れは、荒野の信仰であるが、キリストはこれを冒瀆したとして裁かれたのである。レーモンドは「永遠の価値」とか、「永遠の原則」という言葉をよく使ったが、それが「絶対価値」のことである。

「タルムード」は古代ユダヤ教の伝統の集大成で、『旧約聖書』の創造的解釈として独自の聖典である。ユダヤ人は「トーラー」と「タルムード」の言葉にしたがい、いかに生きてゆくかが長い間の精神指導の基本となった。ユダヤ人に成功者が多いのは、このことであるとされている。「タルムード」はユダヤ人の日常生活の態度、清潔、食物、服装、祈り、集会、結婚、教育、会堂、安息日、暦等々、人間生活の細部に及んでいる。“隠れユダヤ人”的でもあるレーモンドの生活に影響を与えたことは否めない。しかし日本人にとって神は絶対的でなければ超越的なものでもない。むしろ親和的で大自然に漂うと共に慣習であり、ましてや全能でも全知でもない。

### 3. レーモンドは神秘的超自然主義(オカルト)者 —ノエミも神智学的な無宗教者—

土屋重文は私にレーモンドは「神秘的超自然主義者」であると教示してくれた。レーモンドの「デザインにおける永遠の価値」(1949年)に、

大自然に触れることだ。自然に包括されて、さらに、われわれの感覚やことばを超越し、超意識的な、靈感と啓示にふれるのだ。

「宇宙の秩序を守るのが大自然の法則」であり、その自然を造ったのは神で、神のために芸術家はモニュメントを造る。それが建築である。レーモンドは絶対者である神の超越的存在を内的な芸術的創造行為によって直接的に体験しようとするのが「神秘主義」であるが、「自然主義」は存在価値の中に自然を見る立場で、常に「大自然の基本法則」として認知しようとしている。

イギリスのロマン派の代表的な詩人のワーズ・ワース(1770-1850)は、自然美を平明な日常語で詠んだ。ワーズ・ワースの自然感には、イギリスの経験主義や汎神論との類似性がある。しかし、彼の正統的キリスト教信仰と汎神論は矛盾する点があった。レーモンドはワーズ・ワースの言葉を引用して、宇宙の靈魂との「不滅の暗示」の経験に、「人間の叡智」があると書いている。

このような考え方がレーモンドを「神秘的超自然主義者」とするのである。レーモンドは『自伝』の末尾に、「日本人のあらゆる

創造への努力には神秘的な直観力が含まれている」と日本人から、その「神秘主義」を学んだと書いているが、それだけではない。ヘレナ・チャプコヴァーは、ノエミ夫人も神秘主義(オカルト)や精神主義に影響されていたことを記録している。レーモンド夫妻は共に神秘主義者であった。熱心なカトリック教徒の詩人でフランス大使のポール・クローデル(図1)が、ノエミ夫人にカトリックへの誘いの手紙を出したが、無駄に終わっている。

キリスト教神学に、法には「神の法があり、自然法があり、国王の法がある」と書いてあるが、レーモンドは山や川とは別に新しく建築をつくる時、神がつくる自然に近づけようとしている。これがレーモンドの超自然主義であり、神により人間以上の力への努力である。そこに理性が働いていて、それが「超」の意味である。世界、宇宙は神が創造した後は、自然法則にしたがって動いている。しかし、建築は被造物として神に替わってそれを変えようとしており、自然法則の普遍的支配(科学的な合理性)により生じる「奇蹟」である。ユダヤ教自体が神秘主義の一面がある。

### 4. シモーヌ・ヴェーユの神秘主義—精神的“美の世界” —ノエミのニューヨーク神智学協会への参加—

レーモンド夫妻(図2)の「美と自由の道」(『朝日ジャーナル』1962年2月25日)には、

フランスの神秘主義者で、世界宗教をうちたてようとして、第二次大戦中にロンドンで亡くなったシモーヌ・ヴェーユ女史(図3)は、次のようなことを記している。「われわれが、心の自由を獲得するには三つの方法がある。その一つが、“世界の美”を創造することだ。“世界の美”(ラ・ポーテ・デュモンド)という言葉自体に、創造することの神秘的な偉大さを感じられる。」ヴェーユ女史の心の中では、“世界の美”がすべての力や生命や物質、さらに自然の法則や、超自然のおきてまでも包含していたようだ。

彼女の考えでは、美の世界を献身的に愛するようになれば、そのシンボルである精神的な理念は自ずと現われてくるというのである。わたしのみるところでは、心の自由をかちとる方法として、美の世界を認識し、教示するという意味からいうと、神道が宗教ではただ一つの道だと思う。

以降は、伊勢神宮の神道による日本民族の美的感覚と、大自然

の調和について書かれている。私はフランス哲学者で社会運動家でもあるヴェーユの神秘主義からレーモンド夫妻のキリスト教への対応を知ることができた。ヴェーユは父も母もユダヤ人であった。また、ヴェーユは「人間の中には誰でも聖なるものがある。その人の人格ではなくて、<あの人>のものなのだ。(＜あの人＞というのは、神なのかキリストなのかしりませんが)という言い方をしています」と言う。レーモンドがヴェーユを引用したのもその理由からである。

ヴェーユは「美の必然性」として、神や真理に至る唯一の道として、人は美に面したとき、それを眺め、それ自身の内なる必然性を愛する。つまり、「超自然的認識」である。レーモンド夫妻はヴェーユから多くを学んでいる。ノエミ夫人の略歴を抽出すると、

1889年：ノエミ・パーネサンはマリーとアルフレッドの一人っ子としてフランス・カンヌに生まれる。母マリーはジュネーブのカルビン主義者で、祖先には哲学者のジャン・ジャック・ルソーがいる。父アルフレッドはマルセイユの古いユグノー家出身で、銀行家であった。

1899年：ノエミの母マリーは、サバティカルにてジュネーブに滞在していた言語教師で、アメリカ生まれのフランス人、フランシス・エルベート・ブルックスと再婚した。

1900年：ノエミの義父フランシスは母マリーとノエミをニューヨークに連れていき、ホランスマン学校で職を得た。ノエミは学校に入学し、漫画とスケッチの才能を示す。また、将来歴史学者となるタルボット・ハミリンと共にイヤーブック、ホラス・マナキンを編集する。

1907年：ノエミはコロンビア大学の教員養成大学に入学し、2年間ファインアートを専攻する。ジョン・デューイや日本美術に強く影響を受けた。アーサー・ウェスリ・ダウらの指導を仰ぐ。1909年：ノエミはパリに旅行し、エコール・デ・ラ・グランデ・ショウミエールにて油絵を学ぶ。彫刻家セント・クレア・ブレッソンと一生の友達となり、神智学を学ぶ。

(以上、「アントニン&ノエミ・レーモンドのトータルデザイン」住総研 都市論文学No.43 2016年版)

ノエミが神智学と出会ったのはパリであった。以降の年譜にも、ノエミがニューヨークの神智学協会に入会したことは、この略歴では書かれていない。1909年以後のことであろうか、その協会は1875年に、ロシアの神秘思想家であるヘレナ・ブ

#### 執筆者プロフィール

松野 高久(まつの・たかひさ)

1944年東京都浅草に生まれる。1968年東京工業大学理工学部建築学科(清家研究室)卒業。同年、株式会社レーモンド建築設計事務所入所。建築設計の傍ら1997年第1回長塚節文学賞・最優秀賞『矢を負ひて薙れし白き鹿人—長塚節臨死歌考』を受賞。1993~96年日本工業大学建築学科非常勤講師。「長塚節研究会」の常任理事。2005年株式会社環境デザイン研究所入所。主な著書に『ロゴスの建築家 清家清の「私の家」そして家族愛』(明文社 2018年)がある。2022年に谷口吉郎建築論を出版予定。

ラバツキー女史(1831-1891)により創設された。

ブラバツキーは、太古以来、宇宙と人間の起源をめぐる秘密が特定の秘信参入者たちの間で伝承され、後にそこから東西の諸宗教が、それぞれ時代にふさわしい形式をとって生じるようになったが、現代はその秘伝の重要な部分を公開し、諸宗教間の対立を超えて、再び根源的な神的容姿のもとに復帰すべき時期に来ているというのが、協会の主旨であった。くいかなる宗教も真理より高くない」とというのが、この協会のモットーであった。人間の本质を宇宙のヒエラルキーの中に正しく位置づけようと、鉱物、植物、動物、人間から霊的諸存在にまで至る存在の宇宙的統一性の根拠を提示しようと試みていた。正に、ブラバツキーの主旨は、ノエミのデザインの根拠ともなっていた。動物愛護もその一環かもしれない。したがって、ノエミはいくらカトリック教をすすめられても同意しなかったのも、この協会に所属していたからである。

「神智学」(テオゾフィー)とは、通常的人間的な認識能力を超えた神秘的、直感的の靈知によって神を体験、認識しようとする神秘説。グノーシス主義などの神秘主義にうかがえる。「神智」とは、靈妙な知覚のことである。ルドルフ・シュタイナー(図4)(1861-1925)は神秘的思想家で、建築家でもあり、スイスのドルナッハに「ゲーテアナム」(ゲーテ館)(図5)を設計した。神智学についてシュタイナーは、「人間存在における精神的なものを、宇宙における精神的なものへと導こうとする認識への道」であると。シュタイナーはドイツ神智学会の代表者であった。その他に、芸術家のカンディンスキー(1866-1944)やパウル・クレー(1879-1940)やピエト・モンドリアン(1861-1925)、プラハ生まれの小説家のフランツ・カフカ(1883-1924)により「神智学」と呼ばれた。モンドリアンは20世紀の抽象絵画の生みの親で、「デ・スティル」の推進者であったが、神智学に打ち込み、アムステルダム神智学会に入会する。「エーテル界」を透視する「超感覚的認識」で現実には僅かにしか利用しない。彼は宇宙をキャンパス上に再現することで、厳然とした秩序が潜在することを、「黒い線と原色の面」で表現し、新造形主義を提唱した。

神智学協会は1882年には本部がインドのマドラスに移され、心霊現象の研究を軸としながら、その成果をもとにさまざまな霊的進化の道を実践することを目的とし活動を継続している。その教義は、輪廻、解脱を説く仏教やヒンドゥー教の教義に負うところが少なくない。(続く)